

## 言語系研究テーマの選び方と突き詰め方

森 篤嗣

### 【キーワード】

大学院重点化、大学教員公募、査読、反証可能性、オリジナリティ、量的研究、質的研究

### 【要旨】

本稿は、大学院重点化と大学教員公募の競争激化の話からはじめ、職業としての研究者を目指す大学院生に、査読に通る研究テーマを選ぶために必要な考え方に関して情報提供しようとするものである。まず前提として、大学院生の心得5つ（興味、説得力と査読、貢献、反証可能性、オリジナリティ）を示した。そして、研究テーマは「目的（問い）」ありきであり、「方法」は「目的」に合わせて選ぶべきであることを述べた。研究テーマの突き詰め方はケースバイケースであるが、「調べただけ研究」にならないための工夫を紹介した。査読誌掲載は院生だけで競争しているわけではなく、大学専任教員とも同列に並べられ、ダブルブラインドの上、審査されることを意識しておくべきである。研究する人間全員に等しく与えられているのは「時間」であり、差があるのは「資金」と「能力（経験）」である。「時間」の有効活用こそが、大学院生が職業としての研究者へと近づいていくための唯一の道である。

### 1. はじめに

本稿は日本語を中心とした言語研究、言語教育研究関連の研究テーマの選び方と突き詰め方について情報提供をおこなおうとするものである。本稿はいわゆる学術論文ではなく、多くは筆者の経験と主観に基づいたエッセイ的な文章であることを先にお断りしておきたい。

### 2. 大学院重点化と大学教員公募の激化

#### 2-1 職業としての研究者を目指すということ

研究テーマ選びと進め方という本題に移る前に確認しておきたいことがある。それは大学院修了後のキャリアパスをどう考えるのかということである。言ってしまうと、大学院修了後に大学教員を目指さないのであれば、研究テーマも進め方も好きなように自

由にして構わない<sup>1</sup>。本稿の対象は職業としての研究者を目指す大学院生である。

「大学院は研究をするところだ」というのは言うまでもないことだが、純粋に「研究をする」ということだけが目的であれば、人文系の場合は大学院に所属する必要もないはずである。実際、方言や郷土史などの分野では、在野にも有力な研究者が多数いる。つまり、「研究をする（研究者になる）」ということと「大学教員になる」ということはイコールではないのである。「生き方としての研究者」と、「職業としての研究者」は異なる概念であると言ってよいだろう。

それでも全く収入がない状態で研究を継続することは難しいだろうし、収入を得るための仕事をしながらでは研究を継続するモチベーションの維持も難しいだろう。そうなると、職業としての研究者を目指す場合は、必然的に大学教員を目指して大学教員公募に立ち向かうことになる。しかし、大学院を修了すれば大学教員になれるかという点、これが絶望的なぐらい難しい。能力や研究業績が必要とされることはもちろんであるが、かなり運にも左右される道だということを最初に知っておいて欲しい。

## 2-2 大学院重点化と日本語教育の需要増

図1は2022年12月の文部科学省学校基本調査における「大学院を設置する学校数、大学院の在籍者数（昭和25年～）」に基づいて作成したグラフである。

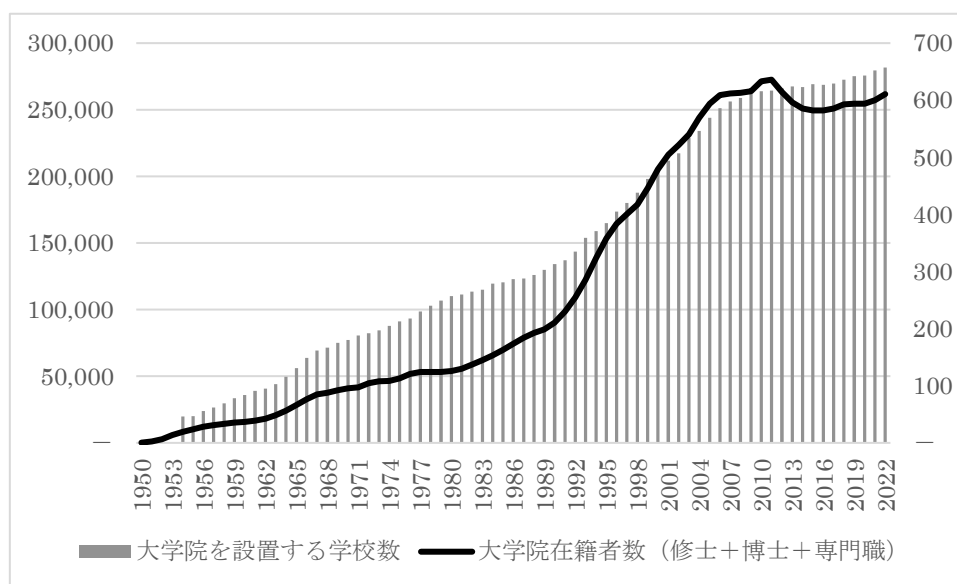


図1 大学院を設置する学校数と大学院在籍者数（修士+博士+専門職）

1991年の東京大学を皮切りに、2008年までにおこなわれた大学院重点化の影響によ

<sup>1</sup> ただし、アカデミックの世界には研究に対する最低限のルールがあるため、指導教員の指導はきちんと受けよう。

り、1990年代から2000年代にかけて大学院設置数、大学院在籍者数が急激に増加していることがわかる。大学院重点化以前（～1990年）までにも、大学院を修了しても大学教員になることができないオーバードクター問題は既に存在したが、大学院重点化以降ではさらに大学教員公募は激化することとなった。

大学教員への道は文系と理系でかなり事情が異なる。本稿で対象とする言語系分野に限ってみると、日本語教育や英語教育といったいわゆる語学教育のポストが比較的多いため、他分野よりはやや機会に恵まれている<sup>2</sup>。特に日本語教育分野に関しては、「留学生10万人計画（1983年）」、「国立大学留学生センターの設置（1990年代）」、「留学生30万人計画（2008年）」と、大学院重点化による供給増をカバーする需要増があったのは幸いだった。しかし、2019年には留学生30万人も達成され、2023年現在はこれらの特異な需要増は既に存在しないが、図1の通り大学院生数は高止まりしている。

### 2-3 筆者の大学教員公募応募歴を振り返る

筆者は1998年4月に修士課程入学、2000年4月に博士後期課程入学、2004年3月に博士号を取得している。先に述べた国立大学留学生センター設置による需要増には乗り遅れた世代である。博士後期課程在学中から大学教員公募に応募を始め、ことごとく書類審査で落ちた。初めて面接（任期付き助手）に呼ばれたのは、2000年度の応募開始から5年目（博士取得後1年目）の2004年度、通算32回目の応募だった<sup>3</sup>。

2004年当時の言語系分野ではそれほど任期付きポストというのが一般的であったわけではなかったが、2023年現在では人生最初のポストが任期付きであることは一般的になったと言える。非常勤講師や任期付きポストを経て、任期無しポスト（パーマネント）を目指すというのが一般的なステップとなっている。

その後、運良く2007年度に通算53回目の応募で任期無しポストを得ることができた。2023年度現在、大学教員公募の応募歴は24年目で通算70回、その中で面接まで進んだのは9回（12.9%）、内定は4回（5.7%）だった<sup>4</sup>。これが多いか少ないかはわからないが、参考になればと思い情報開示してみた。

この結果を支えた一部は、修士課程時代から26年間継続して得てきた査読付きを含

<sup>2</sup> といっても、研究者の就職活動に必須のJREC-INを見ている、日本語学・日本語教育分野の求人は全国で年に多くとも100ほどだろうか。2022年12月の文部科学省学校基本調査における「博士課程の状況別卒業生数」によると、博士後期課程を終えた者（博士号取得者とは限らない）は人文科学（文学+その他）で679人、教育学で268人である。このうち日本語学、日本語教育分野がどれだけを占めるか不明だが、転職希望者も多数いることを考えると、明らかに需要に比してポストが足りないのは自明である。

<sup>3</sup> 運良く初めての面接で採用された。ちなみに「面接に呼ばれるようになると就職も近い」とはよく言われることで、確かにこの時期に連続して呼ばれた。面接に呼ばれるということは、その年齢時点での当落線上に近づいたということだと思われる。

<sup>4</sup> ちなみに一度パーマネントを得たあと、ある程度業績が積み上がってからも、ほとんど書類選考落ちをしている。大学教員公募は研究業績コンテストではなく、あくまで条件に合う人を探すためのものだというのを、選考側にもなってみて改めて痛感する。

めた研究業績だろう。一つだけ言えることは、筆者が大学教員公募に応募を始めた2000年度よりも、2023年度現在の方が比べ物にならないくらい競争が激しく、難易度が高いということである。少子化は進み、人文系研究者需要は縮小している。その中で大学教員公募に立ち向かっていくときに、査読に通る研究テーマは必須の武器である<sup>5</sup>。しかし、自分自身の足跡を振り返ると、職業としての研究者を目指す息巻いていたものの、大学院生時代は情報が少なく暗中模索であった。だからこそ、少しでも自身の経験を還元すべく情報提供をおこなってみた次第である。

### 3. 研究に対する大学院生の心得

#### 3-1 5つの心得

筆者は大学院ゼミの初回の授業で、研究に対する「大学院生の心得」として、下記の5つを示すようにしている<sup>6</sup>。研究テーマの選び方の前提として紹介したい。

- (1) 興味があることをしよう（でないと続きません）
- (2) 他人にわかってもらえるように頑張ろう（研究とは「説得」わかってもらえないと全てが無）
- (3) 社会の役に立つことをしよう（基礎でも応用でも研究はどこかで世の役に立つべき）
- (4) 反証可能性があることをしよう（「あなたの感想でしょ」と言われたいために統計の勉強とかも）
- (5) オリジナリティを求めよう（最初に来そうですけど、そんなに簡単じゃないので修士では必須ではない）

学部生の卒業論文では（1）、博士前期課程の修士論文では（1）～（3）、博士後期課程の博士論文では（1）～（5）が必要であると説明している。もちろんこれは最低要件であって、卒業論文で（1）～（5）を満たすのであれば、それはそれで素晴らしいことである。

#### 3-2 興味

まず、研究の基本は自分自身の「興味があること」を探ることである。自分自身が何に興味があるのかをよく考えてみて欲しい。日本語学は言語の研究だがその背景に人間

<sup>5</sup> 大学教員への道はまずは大学非常勤講師から始まる。非常勤講師を得るには最低限の研究業績（紀要等でも可）と指導教員のコネクションが必要である。そして、専任大学教員公募に必要なのは、学位（博士号）、研究業績（査読付き論文）、教育歴（大学非常勤講師）である。ただし、注3でも述べたようにこれらは最低条件に過ぎず、最終的には先方の条件に合うかどうかで決まるため、かなり運にも左右される。

<sup>6</sup> あくまで筆者の考え方やポリシーに基づくものであり、これが正しいとか一般的だと主張する意図はない。特に（3）の社会貢献については意見が分かれるところだろう。

がいる研究、日本語教育学は人間の研究だがその背景に言語がある研究である。どちらに興味があるだろうか。「日本語教育文法」や「第二言語習得」は両者にまたがる研究であるが、言語と人間のどちらを重視するかで研究テーマも変わってくる。

### 3-3 説得力と査読

研究内容がどんなに素晴らしくても、他人にわかってもらえるように説明できなければ評価されない。伝わらなければ、結果として何も言っていないのと同じである<sup>7</sup>。その最たる例が、査読である<sup>8</sup>。査読とは、投稿した論文を複数の査読者が読み評価するシステムで、投稿者と査読者が互いに知らされないダブルブラインド方式と、投稿者には査読者は知らされないが査読者には投稿者を知らせるシングルブラインド方式がある。いずれにせよ、投稿者は第三者である査読者に自身の研究の意義を説得的に伝えなければならぬ。

まず知っておいて欲しいことは、査読誌投稿は不採用で当たり前であるということである。雑誌にもよるが採択率は10～30%程度であることがほとんどで、しかも投稿者は大学院生に限らず、現職の大学教員もいる。不採用になるとショックを受けると思うが、査読コメントは査読者との対話と考え、前向きにとらえよう。

どの査読誌を選ぶかということも重要である。石黒（2021：193-195）などでも指摘されているが、投稿先を選ぶ際には「知名度」「専門性」「投稿条件（投稿資格や分量など）」をチェックすること<sup>9</sup>。質的研究の場合は「分量」が重要になってくる。また、その分野でよく知られている雑誌でないと大学教員公募において研究業績として高く評価されにくいということもある。投稿先の学会が日本学術会議協力学術研究団体リストに入っているかも目安になる。編集委員や査読者が公開されている場合は顔ぶれをチェックしておくことで、当該学会が重視している研究テーマがわかる。そうすると、応募するかどうかという検討の材料になるだけでなく、書きぶりも調整できるかもしれない。

そして、もし投稿後に「修正採用」や「修正再査読」の結果が返ってきたら、本文の修正を丁寧におこなうべきことは言うまでもなく、さらに修正報告書をこれでもかというぐらい丁寧に書くことがとにかく重要である<sup>10</sup>。

<sup>7</sup> この台詞は山内博之先生にご教示いただいたもので、強く印象に残っている。

<sup>8</sup> 修士論文は多くの場合、査読誌掲載は条件になってないことが多いため、学会発表応募に読み替えて構わない。もしくは一般論として、ゼミないし外部の人に自身の研究を「わかってもらう」ことが研究という営みだと考えてもらってもよい。

<sup>9</sup> 査読誌は二重投稿（同じ研究内容を複数の雑誌に同時に投稿すること）にきわめて厳しいので注意して欲しい。不採用の結果が返ってきてから、コメントに従って書き直して、別の雑誌に投稿するのは可。また、博士前期課程では自身の研究テーマは一つしかないのが一般的であるが、博士後期課程では複数の研究テーマに分割して別々に投稿するので、各研究テーマの差別化に細心の注意を払い、二重投稿を疑われないように注意すること。

<sup>10</sup> 査読結果は「採用 (A)」「修正採用 (B)」「修正再査読 (C)」「不採用 (D)」の四段階が一般的である。雑誌によっては「修正再査読 (C)」がなく三段階のところもある。

### 3-4 社会貢献

研究には基礎研究と応用研究がある。基礎研究も大切なので、全ての研究が社会の役に立つ必要はないのではないかという考え方もあると思うが、せつかくの研究成果なので何らか役に立った方が社会の進展にも寄与できるし、自身が属する研究分野の価値も向上するだろう<sup>11</sup>。

言語研究の場合は「教育への寄与」というのがわかりやすい<sup>12</sup>。日本語教育研究の有用なガイドである本田ほか（2019：21）では、日本語学研究の教育への寄与について下記のような4つのレベルがあると述べている。

- a. 全く教育には触れないもの
- b. 強引でも1行程度は触れるもの（森 2004）
- c. 量は多くなくてもはっきりと教育との関係を述べているもの
- d. 教育について1節を立てて深く論じているもの

このうちbは往生際の悪い例として挙げられている。つまり、ほとんど教育への寄与をするつもりがないのに、仕方なしに申し訳程度に書いているという指摘である<sup>13</sup>。確かに『日本語教育』などの教育系の雑誌ではaでは難しい。ちなみに昨今では教育への寄与を述べるのにbはほとんどなく、cやdのようなしっかりとした記述が必要である。

### 3-5 反証可能性

研究テーマを設定したら、その研究テーマで明らかにすることを短くまとめた研究課題や仮説を記す必要がある。研究はできる限り客観的な証拠を基に、読者や査読者を説得しなければならないため、反証可能性があるものでなければならない。

反証可能性とは「誤りを検証できる可能性があること」と定義される。科学の必要条件とも言われる。

- (6) 東京の天気は基本的に晴れである。

例えば、(6)のような仮説は反証可能性があるだろうか。現実として東京の天気は晴れのことも多いだろうが、雨が降ることもある。そこで「東京は雨が降ることもある」

<sup>11</sup> 昨今の人文系バッシングは、文系の研究が「社会の役に立たないこと＝趣味」と見られてしまっている点にもあるだろう。そうではないということを主張していくことも研究分野の存続のためには必要である。

<sup>12</sup> 他にも自動翻訳や人工知能への寄与もある、これからのさらなる研究に期待したい。

<sup>13</sup> しかもこのbの例として、筆者の森（2004）が往生際の悪い論文の例に挙げられている。森（2004）は筆者が博士後期課程在籍時に書き、初めて掲載された査読付き論文である。確かに当時は日本語教育を始める前の日本語学の一院生で、教育への寄与の意識は薄かったことは反省している。ちなみにこの部分の執筆担当者は筆者友人の岩田一成氏である。

という指摘をしたとき、(6)の研究課題は誤りだと言えるだろうか。もし、(6)の主張をした人が「確かに東京は雨が降ることもあるが、晴れの日の方が多い。だから私の説の反証には当たらない」と言ったとしたらどうだろうか。これだと、永遠に水掛け論が繰り返され、決着が付かない。

これは「基本的に」という文言が問題となっている。「基本的に」が何を指すかということを定義せずに(6)が書かれているため、反証可能性がない状態になっている。

(7) 東京の天気は1年のうち80%以上が晴れである。

仮に「基本的に」の代わりに「1年のうちに80%以上が」に差し替えてみたらどうだろう。(7)に対して、東京で雨や雪や曇り(晴れ以外)が20%以上あるというデータを提示すると反証されることになる<sup>14</sup>。

研究課題や仮説を述べる側からすると、反証される可能性があることは好ましいことではないと考えるかもしれないが、反証可能性がない研究は科学ではない<sup>15</sup>。「私がそう思うからそうなんです」という研究テーマにならないように注意が必要である<sup>16</sup>。

### 3-6 オリジナリティ

指導教員に「研究テーマを決めるときに必要なことはなんですか?」と質問したことがある人がいたら、多くの場合「それはオリジナリティだ」という答えをもらったのではないだろうか。確かに研究においてオリジナリティは重要である。しかし、オリジナリティがある研究テーマを探すことは、そう簡単なことではない。むしろ、オリジナリティのある研究テーマがどんどん見つけられる人であれば、職業としての研究者になることはたやすいだろう。

言うまでもなく、「オリジナリティがある=誰もやっていない」ということになる。しかし、なぜ誰もやっていないのか少し立ち止まって考えてみて欲しい。「誰もやっていない=誰も思いついていない」とは限らない。「何か致命的な問題があって取り組めない」、「やっても社会的波及効果が乏しい」、「コストに対して得られる成果が見合わない」ということかもしれない。誰も思いついていないオリジナリティのある研究テーマは、そうそう見つけられるものではない<sup>17</sup>。

また、「オリジナリティがない」ということは、言い換えれば「みんなが注目している」ということでもある。流行っているから研究テーマにするという考え方はあまりよ

<sup>14</sup> もちろんさらに突き詰めれば、「東京とは具体的にどこ(市区町村)を測定地点とするか」や、「1年とは西暦何年のどの期間か」などを定義する必要もあるだろう。

<sup>15</sup> このことは福嶋健伸先生にご指摘いただき、強く印象に残っている。

<sup>16</sup> 「どのように」や「どのような」という文言も反証可能性がない仮説になりやすい。例えば、「日本語はどのような言語か」という仮説は反証しようがない。

<sup>17</sup> 大学院生時代には「自分は特別だ」という全能感がある人でも、研究を長く続けられれば続けるほど、自分自身がいかに凡才かを思い知るといのが常である。

ろしくないが、それでも注目のテーマに取り組むのは戦略的に悪いことではない。先行研究をよく調べ、先行研究とほぼ同じ枠組みで、ある条件だけ変えてみたり、複数の先行研究の内容と方法を組み合わせてみたりするのも研究テーマの選び方の一つである。

## 4. 研究テーマの選び方

### 4-1 「問い」を立てる

研究とは「問いを立てる」ことから始まる。高校までの「勉強」が誰かが立てた問いに答えるものであるのに対し、「研究」では自ら問いを探し、先行研究を調査して研究課題として意義があるかを確認する必要がある。石黒（2021：44）では「研究課題は問いである以上、1文の疑問文として明確な形を取れる必要があります」と述べられているように、明確で短く、説得的な問いを立てることは研究の成功に不可欠である<sup>18</sup>。

どのような問いを立てるかは、自分自身の興味・関心によるとしか言いようがないが、注意すべき点はある。例えば、「比較」という観点である。中国語話者の研究をするのに中国語話者だけを調べたのでは、得られた結果が中国語話者の特徴なのか、日本語非母語話者の特徴なのか特定することができない。

### 4-2 目的が先か方法が先か

大学院生にどのような研究がしたいかと問うと、「アспект研究がしたいです」、「M-GTA がしたいです」、「コーパス研究がしたいです」、「中国語母語話者の研究がしたいです」といった答えが返ってくることもある。コーパスや M-GTA は研究の「方法」であり、アспектや中国語話者は研究の「対象」である。いずれも研究テーマそのものではない。

研究テーマに必要なのは、先にも述べたように問いを立てることである。いわば研究の「目的」と言ってもよいだろう。解決すべき問いが見つからないのに、方法や対象から先に決めてしまうのは、可能性を狭めることになる。理想は「目的」が先にあって、それに合わせた「方法」や「対象」を探して身につけることである<sup>19</sup>。

### 4-3 量的研究

研究方法には、アンケート、実験法、コーパスなどの量的研究と、インタビュー、フィールドワーク、エスノグラフィー（参与観察／動画観察）、ケーススタディー、グラウンデッドセオリーアプローチなどの質的研究がある。あまり言われているのを聞かないが、記述文法（内省）も質的研究の範疇だろう。また、質的研究と量的研究を合わせ

<sup>18</sup> 建石始氏と日本語教育文法研究について議論していたときに、「どういう研究なのか 15秒で説明できるぐらいでない」と、教育現場にはアピールが難しい」という話をしていただけがある。

<sup>19</sup> ただし、中俣（2011）のコーパス・ドライブン・アプローチのような「方法」から「目的」という逆ルートも少数ながらある。



て用いたものを混合研究法ということもある。

量的アプローチで注意したいのは、サンプルサイズと検定結果の関係である。例えば、相関係数における  $n=5$  のときと、 $n=300$  のときでは限界値は全く異なる。

(8)  $n=5$  のとき、相関係数 0.811 で 5%有意

(9)  $n=300$  のとき、相関係数 0.113 で 5%有意

一般的には 0.113 は「相関無し」とみなすところだが、標本数 300 だとそれは有意な相関となる。つまり、「標本数を増やす＝バラツキが少なくなる＝少しの差でも意味がある」ということになる。アンケートをすることになったときに、「何人集めたらいいですか」と聞かれることがあるが、特に決まりはない。ただ、少なければ少ないほど有意差は出にくいということは知っておいた方がよいだろう<sup>20</sup>。

こうしたことに配慮が必要だが、それでも統計的検定を使う意義はある。先にも述べたように、研究は説得であるので、万人が納得しやすい指標を示すことは効果的だからである。例えば、「ピザの大きさどれくらい？」という問いに対して、「まあまあ大きい」、「手のひらぐらい」、「M ぐらい（店によって違う）」といった答えが返ってきたら、「ちゃんと測れよ！」と言いたくならないだろうか。統計的検定は定規のようなもので、「(データが同一であれば) いつどこでなにを測っても同じ結果になる」というメリット、すなわち再現可能性が確保される。

#### 4-4 タグ付け

次にコーパス研究での「タグ付け」と呼ばれるデータ処理を例に考えてみよう<sup>21</sup>。

	A	B
1	りんご	1
2	白菜	2
3	みかん	1
4	キャベツ	1
5	ピーマン	1
6	パイナップル	2
7	.	
8	.	
9	.	
10	.	
11	ドリアン	1
12	チコリー	2

図2 データ処理「果物と野菜の区別」

<sup>20</sup> もちろん少なすぎると、集めたサンプルが母集団における代表性を持つのか疑わしい。

<sup>21</sup> 質的研究における「コーディング」も似たところがある。また、コーパス研究の方法については森ほか（2018）も参照して欲しい。

図2はA列のデータに対してB列に果物なら1、野菜なら2というタグ付けをするという例である。こうした単純なタグ付けをするとして、あなたは何例までなら手作業で直感的に「できる」と考えるだろうか。数百？数千？数万？

どうしても手作業が必要なことはあるが、「たくさんやればエライ」というわけでもない。人間が手作業でやると、必ずミスをする可能性があるし、判断にも揺れがあるかもしれない。そうすると、再現可能性がなくなる。量的研究では、再現可能性がなくなるのは、事後検証のことを考えるとかなり大きなデメリットである。

あなたは図2を見たときに「こういうのはプログラムで処理する」という発想はあっただろうか。もちろん、野菜と果物のリストをどこかから得て、それを学習させればプログラムで処理することはできるだろう。しかし、リストが正しい保証はないし、表記揺れなど例外も生じる<sup>22</sup>。例外をどうするかというのは、かなり大きな問題である。

調査対象データの「例外」を許容する発想は、文系と理系の違いでもある。あくまで筆者の主観が入っていることは否めないが、隅々まで自分の目で見て突き詰めるのが文系だとすると、例外を統計的に処理するのが理系ではないだろうか<sup>23</sup>。そう考えると、文系が統計処理を導入するのは、根本的にポリシーに反するという考え方もある。敢えて「外れ値」を追究するのが文系の研究の目指すところだという発想もあり得るからである。ただ、そもそも文系と理系という区分自体が古く、例外を許容するという発想を持つか否かは、分野ではなく研究者自身のポリシーの問題と言えるだろう。

#### 4-5 質的研究

質的研究とは、 $n=1$ の意義を模索する研究である<sup>24</sup>。インタビューや参与観察を始めとする質的研究においては、「偏りや例外があるということにこそ意味がある」、「一般化を目指しているわけではない」という主張から、先の例外処理の話とは逆に、敢えて「外れ値」を追究するという姿勢の研究ということになる。この主張が正論なのか詭弁なのかを決めるのは、その内容次第である。研究は「説得」であるからだ<sup>25</sup>。

$n=1$ の研究（内省による文法研究も）が価値あるものとして受け入れられることはある。例えば、大久保（1967）では、国立国語研究所の所員だった大久保愛氏が自身の娘（ $n=1$ ）の言語発達を克明に記録した縦断研究の成果が記されている。「なぜその対象者なのか」と問われれば、「娘だったから」としか言いようがないが、唯一無二の研究成果であることは誰しも認めるところだろう。

<sup>22</sup> とりわけ文法研究に関して言えば、機能語の意味・用法の分類は機械が苦手なところなので、手作業でやらざるを得ないのが現状である。

<sup>23</sup> この点について、本稿の元となった「2022年度さいたま言語研究会研究例会」での講演後に、劉羅麟氏から統計的検定は使い方次第で、むしろ例外を検知したり、処理したりできるという指摘をいただいた。確かに良い使い手にとってはそういう側面もあろう。

<sup>24</sup> 統計学では $N$ =母数、 $n$ =サンプルとされる。

<sup>25</sup> 質的研究については筆者の不得手で記述が薄くて申し訳ない。質的言語教育研究については、八木ほか（2021）が有用であるので参照して欲しい。

## 5. 研究テーマの突き詰め方

### 5-1 「問い」に合わせて方法を考える

「問い」に合わせて方法を考える事例として、森（2011）による仮説の設定と分析の方法を挙げてみる。森（2011）は、文法研究に複数の言語使用調査を組み合わせ、適用した研究である。

- (10) 論点1. 「へ」を導入するのは、日本語教育の勝手な都合ではないか（→日本語教科書調査、学習者コーパス調査）<sup>26</sup>。
- (11) 論点2. そもそも、現代において日本語母語話者は「へ」を使っているか（→歴史的経緯、現代語大規模コーパス調査、言語使用調査）。

言語使用調査の設計は下記の通りである。

- (12) 潜在的×書き言葉 地図を見せて目的地までの道案内を作文
- (13) 潜在的×話し言葉 目的を隠した道案内インタビュー
- (14) 顕在的×自己使用 単文での助詞の空所穴埋め口頭テスト
- (15) 顕在的×自己使用 文脈の中での助詞の空所穴埋めテスト

これらの4つの言語使用調査を、一般日本語母語話者10名と日本語教師10名を対象に実施した結果は下記の通りである。

表1 言語使用調査の結果（「へ」の使用率）

	潜在的× 書き言葉	潜在的× 話し言葉	顕在的× 自己使用 (単文)	顕在的× 自己使用 (文脈)
一般	7.53%	0%	43.39%	46.63%
教師	4.59%	1.73%	19.68%	26.55%
平均	5.94%	0.91%	31.56%	36.62%

分析結果については、森（2011）を参照して欲しい。ここで述べたいことは、まずは「問い」を立てることありきで、「方法」については、「問い」を明らかにするために工夫すべきということである。森（2011）で用いた言語使用調査という方法は、文法研究では主流ではない。その研究分野で主流の方法ではなく、他分野から方法だけ参考

<sup>26</sup> 本田ほか（2019：173）では、この論点1の表現に対して「日本語教育関係者の思い込みって表現、ちょっときつくないですか？」、「そんな言い方、現職の人にちょっと失礼ですよ！」と対談形式で指摘がある。反省。ちなみに、この部分の執筆担当者も筆者友人の岩田一成氏である。

にして持ってきても問題ない。むしろオリジナリティと評価される場合もある。

## 5-2 「調べただけ研究」にならないために

本田ほか（2019：132）に、「コーパス研究の広がりとともに、「調べただけ研究」という呼び方が定着しつつあるが、結果を提示しただけで終わってしまう研究を揶揄して呼ぶときの言い方である」という指摘がある。これは確かにその通りで、例えばコーパスを用いてランキング表を作っただけでは「誰でもできる」データを示したに過ぎず、まさに「調べただけ研究」である。

それではどうすればよいのだろうか。事例として、森（2012）を用いて「調べただけ研究」にならないための工夫を紹介してみたい。森（2012）では、三つの仮説を結論と共に示している。

- (16) 現実の言語使用において使役の使用率は高いのか→高くない。
- (17) 日本語教育における初級のような易しい文体で使役が使われるのか→使われにくい。
- (18) 強制や許容といった用法が使役の典型と言えるのか→言えない。

上記の結論を導くために用いた調査は、1 は文法形式のランキング表、3 は使役用法の分類表である。では2はどうやって調査したのだろうか。答えは「毎日新聞と毎日小学生新聞の比較をした」である。もちろん、それがベストかどうかはわからない。ただ、研究とは説得であるということを考えると、「易しい文体」を調査するのに工夫が必要だと考え、ひねり出したアイデアである。こうした調査方法に関するアイデアもオリジナリティの一種であると言えるだろう。

## 5-3 研究成果とは

ここまで繰り返し述べてきたことであるが、研究においては「他人にわかってもらうこと」が重要である。逆に言えば、他人を説得し、理解してもらって初めて研究は研究成果になる。そしてその研究成果は、研究業績としてあなたの職業としての研究者人生を支えてくれることだろう。

ここでもう一つ考えておきたいことがある。研究成果を生み出すために必要な物は何だろうか。

- (19) 能力が高い人の研究が評価されるのか？
- (20) 資金を掛けた研究が評価されるのか？
- (21) 時間を掛けた研究が評価されるのか？

実はこの3つは循環する、能力があれば研究業績を積み上げ、奨学金や研究費、果て

は研究ポストが得られる。つまり資金が得られる。資金があればアルバイトを雇用したり、業者に委託したりすることで、自分自身でデータ処理をする時間を短縮することができる。そして、自分自身の時間が多く得られれば、研鑽を積むことで能力向上が見込めるといえるわけである。

このように、研究成果を挙げるために必要な能力・資金・時間は循環する関係にある。果たしてどこがスタートなのだろうか。全員が等しく持っているものは何だろう。これは考えればすぐわかることだが、全員が等しく持つのは「時間」である<sup>27</sup>。時間を有効活用することが、研究成果を挙げるためのスタート地点である。

時間の身近な活用方法としては、「締切の1ヶ月前に論文を完成させる」ということがあるだろう。そこから修正に修正を重ねることで、論文のクオリティを上げることができる。また、普通の人がやらないような時間のかけ方をした研究は評価されやすい。人生の大部分の時間を研究に投じることが物理的にも能力的にも可能かというのは、研究成果を出すための条件として重要な位置を占めるのではないか<sup>28</sup>。

## 6. まとめ

本稿では、大学院重点化と大学教員公募の競争激化の話からはじめ、職業としての研究者を目指す大学院生に、査読に通る研究テーマを選ぶために必要な考え方に関する情報を提供してきた。まず前提として、大学院生の心得5つ（興味、説得力と査読、貢献、反証可能性、オリジナリティ）を示した。そして、研究テーマは「目的（問い）」ありきであり、「方法」は「目的」に合わせて選ぶべきであることを述べた。

研究テーマの突き詰め方はケースバイケースであるが、「調べただけ研究」にならないための工夫を紹介した。査読誌掲載は院生だけで競争しているわけではなく、大学専任教員とも同列に並べられ、ダブルブラインドの上、審査されることを意識しておくべきである。研究する人間全員に等しく与えられているのは「時間」であり、差があるのは「資金」と「能力（経験）」である。「時間」の有効活用こそが、大学院生が職業としての研究者へと近づいていくための唯一の道である。

最後に述べておくと、本稿で述べたのはあくまで凡人のためのセオリーである。例えば、文中にもあったように「誰も思いついていないオリジナリティのある研究テーマ」

<sup>27</sup> ここでは「全員が等しく持っている」と書いたが、実際には専任職を持つ人は、自分自身の研究時間は少ない（ことが多い）。むしろ大学院生こそ、もっとも時間を持っている。そして、大学教員公募において「若い」ということは、何にも代えがたい価値を持つ。同じ研究業績なら確実に若い人が有利である。研究人生において無比なる価値がある若さは、この瞬間にも少しずつ失われている。有効活用して欲しい。

<sup>28</sup> 中俣尚己氏が、個人の研究能力の大小で差がつくというよりも、人生のリソースをどれだけ研究に投下できるかで差がつくという趣旨のことを言っていたのを聞いたとき、非常に腑に落ちた覚えがある。また、庵（2013：188-189）が博士後期課程志望の大学院生に、「私は院生から博士進学を相談された場合、次のように答えることにしている。『あなたは研究が好きですか。研究のことだけ考えて生活することができますか。もしできるなら、頑張って博士に進学してください』と告げるという話も、この話題に通ずる。

がいくらでも思いつくような人間はめったにいないが、一方で稀ではあるが確実に存在はすることも事実である。そういう人間と競争をしなければならないことには絶望を覚えるが、それでも職業としての研究者人生を送ろうと決めた以上はくじけるわけにはいかない。本稿は凡人による凡人のための処方箋である。

## 参考文献

- 庵功雄（2013）『日本語教育・日本語学の「次の一手」』くろしお出版
- 石黒圭（2021）『文系研究者になる』研究社
- 大久保愛（1967）『幼児言語の発達』東京堂出版
- 中俣尚己（2011）「コーパス・ドライブン・アプローチによる日本語教育文法研究：「てある」と「ておく」を例として」森篤嗣・庵功雄（編）『日本語教育文法のための多様なアプローチ』ひつじ書房，pp.215-233.
- 本田弘之・岩田一成・義永美央子・渡部倫子（2019）『[改訂版] 日本語教育学の歩き方』大阪大学出版会
- 森篤嗣（2004）「形容詞連用形に後接するスルーサセルの置換について」『日本語教育』120，pp.33-42.
- 森篤嗣（2011）「着点を表す助詞「に」と「へ」における日本語母語話者の言語使用について」森篤嗣・庵功雄（編）『日本語教育文法のための多様なアプローチ』ひつじ書房，pp.319-341.
- 森篤嗣（2012）「使役における体系と現実の言語使用：日本語教育文法の視点から」『日本語文法』12（1），pp.3-19.
- 森篤嗣ほか（2018）『日本語教育への応用（コーパスで学ぶ日本語学）』朝倉書店
- 八木真奈美ほか（2021）『質的言語教育研究を考えよう：リフレクシブに他者と自己を理解するために』ひつじ書房

（京都外国語大学外国語学部日本語学科教授）